ISSN 1342－8071

ZEPHYROS

2000年
第8号

国立西洋美術館ニュース　ゼフュロス
The National Museum of Western Art, Tokyo

目　　次

イタリア・ルネサンス－
宮廷と都市の文化（仮題）……2
研究員　高梨 光正
《考える人》、《カレーの市民》の
修復と免震化 ……4
‘99年度新収蔵作品……5

イタリア中部地震文化財修復支援募金
活動結果報告 ……6
プログラム……7
西美ニュース ……7
財団インフォメーション ……7
ゼフュロスギャラリー

今回はエッセイ「上野の杜」発はお休みします。

イタリア・ルネサンス

ご記憶のある皆さまもいらっしゃることと思いますが、20年前、イタリア政府の支援のもとに実現された「イタリア・ルネッサンス美術展」が、国立西洋美術館で開催されました。以来、今回で四度目のイタリア・ルネサンス美術の展覧会となります。1999年に開催された、エルミタージュ美術館の所蔵品による「イタリア・ルネサンス美術展」では、フィレンツェ派とヴェネツィア派に焦点を当て、それぞれの特徴を較べて見ていただきました。

この度の展覧会は、再びイタリア政府のご厚意とご支援を賜り、フィレンツェ美術監督局が企画し、イタリアの各都市から優れた作品を集めて行われるイタリアの「ルネサンス文化」の展覧会です。その趣旨は、単にイタリアの「ルネサンス美術」を主眼においたものではなく、イタリア・ルネサンスの「文化」そのものを理解していただくことにあります。レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエッロは、もちろんルネサンス期の人ですが、ルネサンスとは、彼らだけを意味するものではありません。

そもそもイタリアは、1861年サルデーニャ王国に統一される以前は、各地方都市が、それぞれ独立した共和制国家、あるいは公国、封建領主の領土、ロ

フィリッポ・ブルネッレスキ（?）
《サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂クーポラランタンの模型》
15世紀
フィレンツェ大聖堂管財局美術館、フィレンツェ

一宮廷と都市の文化（仮題）

会期：2001年3月20日（火）～7月8日（日）
主催：フィレンツェ・プラート・ピストイア美術歴史財監督局
国立西洋美術館／日本経済新聞社

ーマ教皇領、あるいは外国の領地として管理されていました。つまり、イタリアのルネサンス期の文化というのは、フィレンツェから各地へと広がった新しい芸術の規範をもとに、イタリア半島のありとあらゆる多様性の中から生まれたものなのです。15世紀前半の共和制フィレンツェの時代に、まさに初期フィレンツェ・ルネサンスの文化が花開き、ヴェネツィア共和国では、公的な、あるいは宗教的な儀式や公共建築の充実とともにそれを彩る優れた絵画・彫刻が生まれてゆきました。またローマ教皇庁、コジモ１世以後のトスカーナ大公国、エステ家下のフェッラーラ、そしてマントヴァのゴンザーガ家の宮廷には、優れた芸術家が集い、各宮廷の独自の文化に彩りを添える一方、洗練された技術を持った職人たちが、その技術の粋をこらして、煌びやかな工芸品を生み出してゆきました。こうした芸術創造のエネルギーは、視覚芸術ばかりでなく、音楽、文学、人文学、数学、天文学などの学問のあらゆるジャンルにも共通して流れてゆき、商業活動などで蓄積された経済力を背景に、すばらしい高みへと至ることになります。四分儀や六分儀などの天体観測機器の充実は、大航海時代への道を開き、また地動説を導き出すきっかけにもなります。

展覧会は、フィレンツェを中心としながら、イタリア各地の美術館から集められる、絵画、彫刻、素描、版画、写本、タペストリー、陶器、武具、科学観測用具、そして家具など、多様なジャンルの作品から構成される予定です。会場では、そうした作品を、時代を追いながら、各都市の文化の粋を部屋ごとに見ていただけるように展示に配慮したいと思っています。イタリア・ルネサンスの文化の粋を、ぜひ実感していただきたいと思います。

（研究員　高梨 光正）

サンドロ・ボッティチェッリ
《ホロフェルネスの遺骸の発見》
1470年頃　ウフィッツイ美術館、
フィレンツェ

ミケランジェロ
《ブルータス》
1539-1540年頃　バルジェッロ美術館、
フィレンツェ

《考える人》、《カレーの市民》の修復と免震化

前庭緑化のデザインと彫刻展示について

1998年度に行った《地獄の門》の免震化工事に続いて、《カレーの市民》と《考える人》の２体のロダン作品を新たな免震台座に乗せて展示しました。全体的な展示構想としては、免震、耐震、金属ボルトの腐食などに関する彫刻の保全条件を整える一方、特に夏の日差しの照り返しが激しいコンクリートの前庭を出来るかぎり植栽で被うことで鑑賞環境を改善し、ロダンの代表作として余りにも有名な２体の彫刻の新たな展示を図ろうというものです。

前庭の下には新設の地下展示場があるため、加重や漏水のリスクなどを避けるために様々な与条件を検討しながらデザインが決められました。免震装置の組み込みや植栽の土盛りなどの必要度も考慮して、とりわけ《カレーの市民》は以前の西洋美術館の展示よりは少々高い台座の上に乗ることになりました。

種類の異なる花崗岩の台座（《考える人》は無垢石を彫って制作）の上に置かれた２体の彫刻は、上野公園の道路側からも植栽を通してよく見えるような位置に設置されています。曲線を多用した柔らかな印象の「ホワイト・ガーデン」の中に浮かぶようにも見えるこれらの作品が、前にも増して、多くの人々に親しまれるランドマーク的存在となることを願ってやみません。

（主任研究官　高橋 朋也）

オーギュスト・ロダン
《カレーの市民》
1884-88年

オーギュスト・ロダン
《考える人》（拡大版）
1880年（1902-04に拡大）

免震化と修復

今回の再設置に当たり、前庭全体が企画展示館の屋上であるため、再設置は彫刻や免震装置の重量や構造にも特段に配慮されました。地震の際には床面の振動による同調や増幅による転倒を防止しなければなりません。《カレーの市民》では一体の像の足元が振動に弱く、《考える人》では前方に重心が偏り、転倒しやすい危険性がありました。その一方で台風の際には地震に対応した装置の振動周期によっては、強風では大きな変位をもたらし、装置の能力の限界を超えることも考えられました。《カレーの市民》は庭の中央に、《考える人》は西側に配置され、今回の免震化ではそれぞれの彫刻本体の持つ形状や重量に配慮し、《地獄の門》とは異なる機能、性能の装置が採用されました。また装置と彫刻はこれまでコンクリートのたたきであった庭に、鑑賞環境として優しい植栽を周囲に配して設置し、新たな試みを行っています。

彫刻本体には経年によるボルトの交換、ステンレス鋼材による補強、洗浄、補彩と保護膜塗布が行われました。

（主任研究官　河口 公生）

撮影　（株）スポット商会　山本治道

ヨアヒム・ブーケラール
《十字架を運ぶキリスト》
1562年　油彩・板

ブーケラールはブリューゲルと同時代の16世紀フランドルの画家である。この画家の作品として最もよく知られているのは、前景の食卓に野菜などの食べ物が並べられた台所や市場の場面であるが、宗教主題の小品をも多く制作したものと推測される。こうした小品では、初期フランドル絵画の精緻な描法に変わって、やや粗い筆遣いとそこに生まれる生動感が特徴となっていた。1562年という年記をもつこの《十字架を運ぶキリスト》は、ブーケラールの最初期の作品である。一年後に制作された同主題作品（ハンブルク、クンスト・ハレ）とともに、現在は失われたアールツェンの同主題作品との強い関連を示している。主題は16世紀フランドル絵画で繰り返し取り上げられたもので、本作品が制作された2年後にはブリューゲルのあまりにも有名なウィーン美術史美術館に所蔵される傑作が制作されている。ブリューゲル作品の大きな特徴のひとつに、民衆とは一線を画すかのように前景右側に聖母のグループが大きく描かれていることが挙げられるが、本作品にも同じモティーフが同じ場所に描かれており、関連があったものと思われる。小品ではあるが、激しい感情の昂まりがパノラマ景観の中に見事にとらえられている。

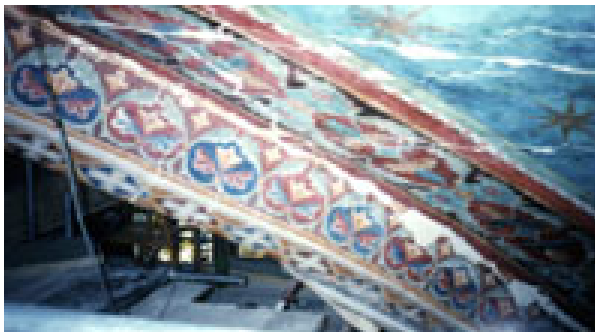
ベルナルド・カヴァッリーノ
《ヘラクレスとオンファレ》
1640年頃　油彩・カンヴァス

カヴァッリーノは17世紀ナポリの画家である。彼はナポリの画家マッシモ・スタンツィオーネに学び、さらにアルテミジア・ジェンティレスキの影響も受けた。この《ヘラクレスとオンファレ》は、ヘルメスによってリュディアの王女オンファレのもとに奴隷として売られた英雄ヘラクレスが、糸紬の仕事をさせられた、という物語に基づいている。画面左には強いキアロスクーロで理想化されていないヘラクレスの肉体が赤裸々に描き出されている。今や奴隷として糸紬をさせられているヘラクレスは、娘たちに囲まれ嘲りの対象となっている。彼を囲む3人の女性たちは、初期のカヴァッリーノに特徴的な、陰影を強く残した描写が用いられている。1640年代のカヴァッリーノの作品は宗教主題が中心で、感情表現を抑えた描写が多いが、この作品では生き生きした笑いが見事に表現され、しかも人物たちは暗いながらもしっかりと意識された微妙な空間にバランス良く配置されている。

レアンドロ・バッサーノ
《最後の審判》
1595～96年頃　油彩・板

レアンドロ・バッサーノは16世紀ヴェネツィア派の代表的な画家、ヤコポ・バッサーノの息子として生まれ、父ヤコポおよび兄フランチェスコから画技を学んだ。レアンドロは父ヤコポと兄フランチェスコの死後、ヴェネツィア統領宮の装飾を手がけた。この《最後の審判》上部には、天国における諸聖人の栄光が、左下には救済される魂、右下には地獄に堕ちる魂が描かれている。さらにこの作品左上には、レアンドロ自身の自画像と、その重要なパトロンであった統領（ドージェ）マリーノ・グリマーニの肖像が描き込まれている。この《最後の審判》はレアンドロの作品として一般に知られる牧歌的主題の作品とは異なり、すばらしい細密描写で人物が描き出されている。さらに自画像にサン・マルコ騎士団の標章が付けられていることから、1595-1596年にかけて統領マリーノ・グリマーニによって騎士に叙せられた記念として、非常に特殊な意味合いをもって描かれたものと推定される。

イタリア中部地震文化財修復支援募金　活動結果報告



天井にできた無数のひび割れを補修したところ

天井裏での補強作業

今から3年前、1997年9月26日にイタリア中部のウンブリア地方とマルケ地方を激しい地震が襲いました。日本からも訪問者の多い聖フランチェスコゆかりの地アッシジで、世界的に有名な壁画群を擁するサン・フランチェスコ聖堂で天井の一部が崩落するなど、深刻な被害がマスコミの報道でも伝えられました。この災害の直後から、被災した文化遺産の復旧の一助になればと、国立西洋美術館内に事務局を設置して募金活動を行なってまいりましたが、発足後約2年半を経て、今年３月末をもちまして本募金は活動を終了しました。これまでご支援いただいた多くの方々に深く感謝の意を表しますとともに、この誌面をおかりして活動結果の概略を報告いたします。

サン・フランチェスコ聖堂、崩落で天井に開いた穴から床を見たところ

すでに1998年発行の「ゼフュロス」4号に掲載されましたように、活動開始から約4か月の間におよそ800万円の支援金を集めることができ、この資金は98年4月にイタリア政府文化財省宛送金され、サン・フランチェスコ聖堂の修復作業に役立てられました。その後も募金活動は継続して行なわれ、とりわけ西洋美術館の改修工事が終了し98年秋に展覧会事業が再開されてからは、館を訪れる多くの美術ファンの方々から途絶えることなく募金をいただきました。またその間に、内外の文化財の保存修復に成果をあげている（財）文化財保護振興財団でも同趣旨の募金が開始され、協力関係に入ったことも大きな出来事でした。

こうして今年3月末の時点で、すでに送金した額を除く募金額累計は約760万円（文化財保護振興財団からの委託分を含む）となり、総金額は1,500万円を超えることができました。この新たに集まった資金も、近くイタリア政府に送金される予定です。また現在事務局では、把握できる全募金者のご芳名簿と決算報告を載せた小パンフレットの印刷を準備しています。募金者の方々に直接お送りすることは経費的技術的に困難なため諦めざるを得ないのですが、西洋美術館ロビーに置いて配付できればと考えています。

昨年6月に、事務局スタッフの越川と塚田が、特別な許可を得てアッシジのサン・フランチェスコ聖堂の修復現場を訪問しました。この教会堂は上下２層に建てられており、崩落が起こったのは上堂の天井です。上堂の内部は依然としていっぱいに足場が組まれ、天井面や天井裏での補強作業や傷んだ壁画の洗浄・補修作業が続けられていました。修復の責任者の方の話では、被災から足場が完成するまでの半年の間は、長く続いた余震の不安もあり本当に辛い状況だったそうですが、私たちの訪問の時点では、すでに山場は越えたという安堵感からか、人々の表情が穏やかで明るいのが印象的でした。

カトリックの聖年にあたる今年はどうしても教会を全面的に再開したいという意図から、作業は急ピッチで進められ、その結果昨年11月からは再び上堂も訪問が可能になっています。しかし、崩落でばらばらになってしまった天井の2面の重要な壁画についてはいまだに丹念な再構成の作業が続けられており、また、サンタ・キアーラ聖堂など、サン・フランチェスコ聖堂以外の歴史建造物では相対的に復旧が遅れているのも気にかかるところです。　（募金事務局記）

上堂内部に組まれた足場

イタリア中部地震文化財修復支援募金

（欧文名称：Help Assisi Japan Office）
特別顧問：平山郁夫／石川六郎
発 起 人：小佐野重利／佐々木英也／高階秀爾／長尾重武／中山公男／西本晃二／若桑みどり
事 務 局：越川倫明／塚田全彦／池田節子（1999年6月まで）／長谷川幸子（1999年7月より）

プログラム

「西美をうたう」－短歌と美術が出会うとき－

会期：2000年7月25日（火）～10月29日（日）
主催：国立西洋美術館／現代歌人協会／西洋美術振興財団

雛鳥孵り羊乳を欲る生気満ち
ダフニスとクロエ愛知り初めつ
大滝貞一

ジャン＝フランソワ・ミレー
《春（ダフニスとクロエ）》
1865年

日本人ほど「詩歌」を愛する国民はいないかもしれません。新聞には古今の名歌が紹介される欄があり、趣味で作られた短歌や俳句が新聞や雑誌に投稿され選評されるコーナーが設けられるなど、今日でも人々の「歌ごころ」が広く浸透していると実感できます。なかでも、日常生活において見い出せる四季折々の美しさや様々な心情を三十一文字で表現する短歌は、比較的自由で制約が少ないことから、どなたにでも楽しめる優れた短詩型のひとつということができるでしょう。日本が世界に誇れるこうした文芸は、昨今、世界でも注目を集め、外国語で短歌や俳句が詠まれる時代となりました。

西洋の美術を短歌に詠むという試みは、西洋と日本の芸術という組合せのみならず、短歌と美術という一見ミスマッチとも思える芸術表現の出会いを楽しもうとするものです。現代歌人が西洋の美術作品を見つめる視点は、きっと新鮮な驚きに満ちていることでしょう。美術研究者や評論家とは違った、抒情あふれる言葉を紡ぎ出してくれるはずです。

美術館に歌人がやってくる―こうした出来事は、これまでの美術館の殻を破るようなひとつの「冒険」であると言ってもよいでしょう。

この展覧会で展示された短歌はすべて、当館売店で販売中の美術歌集『西美をうたう』に収録されています。展覧会終了後も、このハンディな歌集を片手に西洋美術館をぜひ巡ってみてください。鑑賞者の皆様が、この歌集によって新たな感動を味わってくださることを心より期待しております。

（主任研究官　佐藤 直樹）

西美ニュース

入館者が2,500万人を超す

当館では、8月10日（木）に開館以来の入館者が、2,500万人を突破しました。2,500万人目の入館者は、千葉県浦安市の中学2年生、佐藤梨沙さんで母親と妹と一緒に夏休みの宿題のため来館されました。

当館は、フランス政府より寄贈返還された松方コレクションを展示・保管し、また西洋美術全般を対象とする唯一の国立美術館として、1959（昭和34）年6月にオープンし、今年で41年目を迎えます。

この間、開館時の本館に加え新館（昭和54年）企画展示館（平成10年）の新設と、本館・新館のリニューアルを行うなど施設を拡張整備してきました。また、「ミロのビーナス特別公開」（昭和39年）、「バーンズ・コレクション展」（平成6年）など、大規模な展覧会も数多く開催してきました。

今後とも、皆様に親しまれる美術館として努力してまいりたいと思っております。

財団（西洋美術振興財団）インフォメーション

◆人事

3月の理事会
鳥井信一郎氏（サントリー㈱代表取締役社長）に評議員を委嘱　12. 4. 1―13. 3. 31。

6月の理事会
三角理事長辞任（12. 6. 27付）、後任に高階秀爾氏を互選。12. 6. 28―13. 3. 31。

6月の評議員会
遠山敦子氏（国立西洋美術館長）を理事（12. 6. 28付）に選任

◆平成11年度の事業報告

事業報告・収支決算報告
（12. 6. 28理事会・評議員会承認済み）
事業は、事業計画にしたがい概ね前年同様の支援活動を行った。特に資料収集には、過去の実績が少なかったこともあり、重点的支援を行った。ミュージアムショップの運営では、ブックショップの売上が好調で、実績により需要の多い図書等に随時切り替えを行い、また新刊も即配備。西洋美術やその他関連図書を展示販売。およそ55社1,900種類、平成11年度の総売上約30,000冊であった。

編集後記

今回で20世紀最後の発行となりました。
21世紀も内容満載のニュースをお伝えしていきますので、これからもZEPHYROSをよろしくお願いいたします。（ま）

ラファエッロ

ラ・ヴェラータ（ヴェールの女）
1516年頃
油彩・板
85×64ｃｍ
パラティーナ美術館、フィレンツェ
「イタリア・ルネサンス―宮廷と都市の文化」展（仮題）出品作品

● **誌名について**

「ＺＥＰＨＹＲＯＳ」（ゼフュロス）はギリシャ神話の神々のひとりで、西風を司る神様の名前です。西風は、日本では秋の風とされていますが、西欧では暖かさと色さまざまの花々を運ぶ春の風をさします。

ZEPHYROS 国立西洋美術館ニュース
ゼ フ ュ ロ ス

ＺＥＰＨＹＲＯＳ　第8号
印刷発行日　平成12年10月14日（年2回発行）
編　集　国立西洋美術館
印　刷　株式会社　アイネット
発行者　財団法人　西洋美術振興財団
〒110―0007　東京都台東区上野公園7-7
国立西洋美術館内
TEL 03-5685-2122 / FAX 03-3828-5135